
勇者らしくない勇者たち？

月食猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者「りしくない勇者たち？」

【Zコード】

N11060

【作者名】

月食猫

【あらすじ】

ズラに導かれて（？）月詠と日向の二人は魔王が蔓延る異世界へと召喚されてしまった！！そして月詠は『ユルユル勇者』、日向は『ヘッポコ勇者』の称号を手に入れた？
初投稿なので、色々とアドバイス下さい。

百年に一度、魔王の年と言つものがある。そして、その魔王の年の初めに現れた最初の魔王を勇者が倒さない限り、際限なく魔王は増え続ける。逆に、無事勇者が魔王を倒したのならば、後百年は安泰だという言い伝えがあった。

そして、魔王の年一番最初に現れた魔王は、其の名に相応しく強大な力を持つていたがとても心優しい人物だったので、勇者は彼を殺さずについ放つておいてしました。その結果

世界に魔王が溢れてしまいました。

各地に魔王。領主の代わりに魔王。地主の代わりに魔王。貴族や王様になり変わる魔王。どこもかしこも魔王で溢れています。もはや台所でうごめくミスターG並みの多さです。

その為、勇者が一人では追いつかなくなり、各地で勇者を名乗る者も増え、勇者は力自慢達に人気の職業として認められるようになりました。

ですが、その内勇者とは名ばかりの荒くれ者が増え、世の中はどんどん混乱して行きました。

「このままじゃトイカン…。そつじゃ、異世界から真の勇者となりえる者を呼びだせばいいんじゃ…！」

そう考えた、賢者の一人として知られている老人は、やたらめつたらと知つてゐる魔法陣を重ねて

「そいやつさーーー！」

と老人にしては元氣が有り余つていてなおかつ掛け声としてはいかがなものかと言いたくなるような掛け声と共に魔法陣を発動させた。掛け声と共に吹き飛ぶ老人のカツラ。魔法陣が輝きだすとともに、

宙を舞つて いるカツラも輝きを増し、その姿？を消した。

同時刻、影富月詠かげみやづかよとその親友である五十嵐日向いがらしひなたは都内でも有名なクリスマスツリーを見に来ていた。

「あれ…？なんであんな所にカツラが？」

月詠はそう言いながら、クリスマスツリーの一番上を指差した。

「あ…ホントだ」

月詠の言う通り、本来ならば星が燐然と輝いているはずの所にカツラが引っ掛けついていた。しかも、そのカツラそのものが光を放つて いるようだつた。さらに、その光はだんだんと強くなつて いるようだつた。

どうやら、その不自然なカツラの存在に気付いて いるのは月詠と日向だけのようだつた。おかしい、明らかにおかしいと一人がいぶかしんで いると、カツラが一際強く輝き、その光に飲み込まれるかのように一人の姿が消えた。

そして、その輝きに気付いた者も、一人が居なくなつたことに気付く者もいなかつた。

俺達が目を開けると、そこはさつきまでいたクリスマスツリーの前ではなく、暗く見慣れない室内の真ん中辺りに書かれているらしい何やらめちゃくちゃな魔法陣ツボイものの上に立つていた。

せつからくこの後明弥の所にケーキとかをたべ…ごちそうになろうと思つてたのに……。と思つて いた俺は、とりあえず唯一事情を知つてい そうな存在 今日の前でうつぶせに倒れて いるハゲ から事情を聞こうと思つた。

「オイ起きろハゲ親父」

そう言つて容赦なく乱暴に搖すつて いる俺を日向が止めた。

「違うよハゲジジイだよ」

「そりだつたな」

普通だつたらもう少し違う止め方をする俺の親友も混乱しているのか、ちょっとずれたツツ「//」をしてきた。

「ジーさん起きてー」

「返事がない、ただの屍のようだ」

俺はそう言いながら、ジイさんの頭をジイさんのローブで磨いてみた。すると俺のふだけた物言いに反応したのか、今までピクリとも動かなかつたジイさんがまるでゾンビのようになびき飛び起きた。

「誰が屍じや！ ワシはまだピンピンしてあるわつ！ ！」

「オイジジイ今すぐ100字内で状況を説明しろ」

軽く目が据わつてゐる俺達に驚いたのか、ジイさんはしばらく呆然とした後、急に嬉しそうに話し始めた。

「よしよし、どうやら成功した様じや。今この世界は魔王が溢れかえつてゐるような状態なんじや。かといって残念ながらこの世界の勇者たちでは相手にならん…。じゃからワシは異世界から勇者を召喚したんじや！ お一人はこの世界の勇者となるべく選ばれたのじや…！」

「メンソーデイから断る」

速攻で断る俺。

「ちよつと用詠！ 話だけでも聞いてあげよつみ」

「ヤダよ。なんで俺達が知らねえ世界の為にバトらなきゃいけないんだよ」

つー訳でさつと俺達を元の世界に戻せと言ひ俺に、ジイさんはニヤニヤしながら言つた。

「この世界の魔王をほとんど倒さないと戻れないように設定したから無理じや」

そう言つて立てられたジイさんの親指を、俺は思わず折つてしまつた。ジジイが悲鳴を上げてゐるが気にするものか。

「どうしよう僕激弱だよー？」

ジジイの話を聞いて焦る口向に、ジイさんは励ますよつと言つた。

「大丈夫じや、主らはこの世界に来た事でパワーアップしてこる…

…ハズじゅ

「何その超不安になるようなセリフ！最悪だなアンタ！…！」

「逆に不安を煽つただけだつた。

「安心しろ日向。いざとなつたら俺が護つてやる」

「とりあえず、励ましの言葉を言つてみた。

「…勇ましいね月詠」

俺達が勇者になることを認めた様な反応をした事に、ジイさんは満足していた模様だつたが、そろはいかない。

「「とりあえずくたばつとけやこんのクソジジイ！…」」

「ぎゃあああああああああああああああ…！」

ジイさんの所から略だ…貰つた装備を身につけ、俺達は旅をする事にした。一応この世界の知識は頭に入れだし、今の状況もだいたい分かつた。

魔王を倒すのは、マジな流血グロ系の殺しじゃなく、話し合いでによる和解または降参させるのもいいらしい。

途中何度も魔物らしきモノや山賊的な方々に襲われたけど、それはすべて月詠が倒してくれた。マジで最強だ。これなら魔王も倒せるかもしない。

でも、護られてるだけじゃいけないからと思つて、月詠に鍛えてもらつた。おかげで前よりは強くなつた氣がする。…でも、精神までは鍛えきれない感じはするよ。

「俺はなにも見ていない俺はなにも見ていない

「俺もだ。あんな弱そうな魔王は見ていない」

今俺達の目の前にはお花畠があつて、その真ん中あたりに全身真っ黒でトゲトゲした衣装を纏つたカツコい系の青年が、俺達を見

てプルプル震えながら

白旗振っていた。

しかも、風に乗つて微かにだけど

「どうしよう勇者たちに会つちゃつたよウワーン！！」

とこう泣き声が聞こえてきた。マジで魔王か疑いたくなるよ。

「なんだあのオトメン（乙女な男の事）。あんなんでも魔王になれるんだつたらもう末期だろ」

と月詠が言つてたけど、俺のその意見に賛成だよ。

その時、丁度魔王と俺達をはさむようにして魔物が出現。反射で倒しちやつたら、直後に魔王に抱きつかれた。

どうやらこの魔王は、俺達が護つてくれたと勘違いしたらしい。おかげでワンコのように目を輝かせて懐いてきた。

「僕は魔王のフランつて言います！…治癒術が得意なのでどうか一緒に連れてつて下さい！…」

「あのさ、俺達魔王討伐の旅の最中だよ！…それでもいいの！？」
「ハイ！丁度迷子になつてた所ですし、もう僕の城には新しい魔王が住んでると思うんで、大丈夫だと思います！」

「じゃあ、元魔王つて事になるのか」

「つづ月詠！？」

「あ、そうですね」

「じゃあ問題ない。俺の事は月詠と呼んでくれ
「なにナチュラルに挨拶してるのさー？」

「戦力は多い方が良いと思つたから」

「…あ、そうすか…俺の事は口向つて讀んでくれ

「ハイ！宜しくお願ひします、シクヨさん、ヒナタさん！」

しうして、異世界から来たユルユル勇者とヘッポコ勇者の二人組

に元魔王が加わり、このおかしな男三人での奇妙な旅が始まった。

「ところで、なんでお前みたいなのでも魔王になれたんだ？」

「あ、家業だつたんで仕方なく。でも、僕魔力は大きいんで」

「へえ、魔王つて世襲制だつたりするんだ」

「まあ、大体はそちらしいですね。下剋上とかもありますけど」「こら月詠！フラン！何和んでるのさー！早くしないと日が暮れちゃうよー！」

「「はーい」」

…時折この真面目な性格がどうしようもなく憎めしくなる時もあるんだけどね。

(後書き)

気が向いたら続きを書くかもしれません。最後まで読んでいただ
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1106o/>

勇者らしくない勇者たち？

2010年10月10日00時39分発行